普及活動の成果　　様式６（左）

課題名	担い手を支える地域労力支援組織の育成	振興局名	県北振興局
活動対象	労力支援システム活用組織	実施期間	平成28年4月～平成29年3月

【対象の概要】

対象組織は、作業の効率・軽作業化や休日の確保を目的に複数の農家で数名の作業支援者を周年雇用している県北型４組織（柑橘農作業利用組合（25戸）、させぼ南部農援隊（10戸）、相浦谷農作業支援協議会（9戸）、さざんか農援隊（11戸））と肉用牛ヘルパー組合２組織（生月和牛ヘルパー組合（12戸）、松浦定休型ヘルパー組合（13戸））と、JA職業紹介所１ケ所の計７組織である。

【課題設定の背景】

１．各地から新たな労力支援のしくみづくりの要望はあるが、希望農家数、必要時期、雇用頻度、作業内容等の雇用条件の詳細は不明で、最適なしくみの検討はできていない。
２．上記７組織の運営は安定してきたが、作業支援者の安定確保及び能力向上、農家の労務管理能力の向上等の課題がある。
３．田平地域の労力支援組織および佐世保地区のイチゴパッケージセンター（以下、PC）の設立に向け、検討が始まっている。

【活動目標】

１．管内農家に対して雇用要望アンケートを実施し、雇用意向をとりまとめ、農家要望にあった労力支援のしくみを検討する。
２．大学等へ聞き取り調査やJA職業紹介所が行う募集チラシの配布方法の検討を行い、作業支援者の安定確保を目指す。また、新規作業支援者を対象とした技術研修の開催や、利用農家に対して労務管理能力向上を促す資料を配布するなどして、作業支援者の能力向上を目指す。
３．田平地域の労力支援組織と佐世保地区イチゴPCについては、本年度稼働を目指し、関係機関で連携を強化する。

【関係機関との連携（活動体制・役割分担）】

≪県北地域雇用労力支援協議会≫
構成：市・町、JA、共済組合、たばこ耕作組合、県北振興局
役割：地域労力支援システムの提案・モデルの実証、労務管理能力向上活動

【活動経過】（活動体制、指導・支援の経過と手法等）

１．労力協で管内のJA生産部会を対象に農家の要望アンケートを配布、回収した。
２．市内２大学とハローワークの聞き取り調査（大学は求人票も提出）と、各営農経済センターを対象にJA関連施設パート職員の実態調査を行った。生産者と関係機関でアーケードでのみかん収穫アルバイター募集チラシの配布を行い併せてみかん収穫体験会（技術研修）の参加者募集も行った。
　松浦定休型ヘルパー組合の新規ヘルパーを対象に13日間のマンツーマン技術研修を開催した。
　既存組織に対し、運営支援、事例報告支援、作業支援者の就農支援（情報提供など）を行った。
３．田平地域では、県内外の視察研修後、参加希望者による設立検討会を開催した。
　佐世保地区イチゴパッケージセンターの試験運用に向け、運営収支シミュレーションを実施し、目標選果量や作業支援者の確保方法について部会・農協と検討し、部会員に対し利用意向を調査した。
４．農福連携の可能性を確認するため、障害者を対象とするみかん収穫体験会を２回開催した。
５．世知原のサカキ農家より収穫・結束の労力支援のしくみづくりの要望を受け、収穫結束講習会、北川内地区でのモデル実証試験、サカキマップ作成を行った。

アーケードでのみかん収穫アルバイター募集活動

普及活動の成果　　様式６（右）

【普及活動の成果】

１．要望アンケートの回収数は955戸で、約半数が新たなしくみがあれば利用したいとの意向を持っていて管内全域に利用希望者が存在すること、雇用期間としては農繁期のみが最も多いこと、雇用が最も必要な時期は５月下旬であること、収穫作業が中心であること、等がわかった。また、このアンケート結果を受け、JAが職業紹介の拡大を決め、管内全域での職業紹介事業の稼働体制が整った。

２．ハローワークでの聞き取り調査から、求職者は一般的に通勤時間、時給、仕事内容を重視しているが人それぞれ重視項目は異なることや、女性は保険や勤務時間を重視する傾向があること、農業の求人が少ないので農業を希望する求職者も少なく斡旋実績も少ないこと、等がわかった。

　大学に求人票を提出した結果、県立大学生約20名がみかん収穫アルバイターとして就労した。

　松浦ヘルパー組合では新規ヘルパーに対しマンツーマン技術研修を実施し、スムーズな就労を促すことができた。

　させぼ南部農援隊とさざんか農援隊の作業支援者２名が新規就農の意思を固め、新規就農者を輩出する組織育成ができた。

３．田平地域の労力支援組織の参加農家10戸が決定し、運営や利用ルールなど具体的な話し合いを進める段階に入ることができた。

　佐世保地区イチゴパッケージセンターの試験運用が３月中旬から実施することになった。

４．障害者を対象としたみかん収穫体験会には９事業所31名が参加し、体験会の結果、労力として有効なことが分かった。また、障害者事業所側も施設外就労の１つとして農業に関心があることが分かった。

５．サカキの実証試験を実施したことで、課題抽出と対応策の検討ができた。

サカキ結束講習会

農福連携に向けたみかん収穫体験会

【対象の声】

１．常時雇用の前段であり、担い手育成の受け皿としての期待も大きい県北型システムを普及してほしい。（さざんか農援隊組合長）

２．勉強会に出席し、雇い主の安全配慮義務の重要性を再認識できた。多くの農家が雇用確保に苦しんでいる。関係機関で連携し、しくみづくりや雇用の確保について取り組んでほしい。（相浦谷農作業支援協議会会長）

３．県北型システムの運営やJAとの役割分担などについて、実際に取り組んでいる農家の話を聞きたい。（田平協役員）

【今後の課題】

１．JA職業紹介事業の拡大に伴い、求職者確保、農家の労務管理能力の向上、業務の効率化が必要と考えられるため、関係機関で役割分担し支援を行う。

２．松浦ヘルパー組合でヘルパー２名体制の声があがっており、今後の在り方を検討する。

　相浦谷ほか県北型システムの作業支援者確保に向け、就労条件の見直しや作業の平準化について定例会等の場で検討が必要である。

３．田平地区での組織設立に向け、関係機関と具体的な協力体制を検討する。

　佐世保地区イチゴパッケージセンターについては再度利用農家の把握を行うとともに、部会OBやいちご集荷所のパート職員、近隣幼稚園の保護者等に募集をかけて作業員を確保する。

４．みかんで農福連携のモデルを構築し、他作業や他品目でも農福連携の可能性を検討する。

５．さかきの収穫結束サポートシステムの稼働に向け、班体制、日程調整、精算事務、共同結束場の利用方法等詳細を検討し、部会が主体のシステムを目指す。

【成果の活用及び普及活動上の留意点】

１．地域および農家の実態にあった労力支援のしくみを提案し、雇用導入後の経営改善に向けた支援を併せて行うことが必要である。

２．雇用に関する専門家のアドバイスを受けながら進めることが必要である。

発表・参考資料